

禪と社会福祉の関係についての試論

篠原豊和

一、序

禪あるいは仏教は出世間的価値を至高のものとして求めるものである。ここでは世俗的苦悩は単なる煩惱として否定される。一方、社会福祉は、あくまで世俗的安楽、その生活水準の維持を求める運動である。ここには決定的に相容れない価値観の違いがある。以上のことを前提に、現代社会において、禪と社会福祉がいかに関わるか、いや関われるのかということに対して、試論を提出したいと考える。方法としては、主に「仏教社会福祉学(論)」の原理的研究の成果をもとにして考察を進める。

二、「仏教」と「社会福祉」の結合様式

まずはじめに、これまでに「仏教社会福祉学(論)」の原理に関する研究の仏教学からのアプローチがどのようなものであったか。次に、社会福祉学の立場では、それがどのように受け取られてきたのかを見ながら、禪がどのような

な方法で社会福祉に関わっていけるのか、その可能性を探ってみたい。また、ここで中心となるのは「仏教社会福祉学（論）」の基礎作業である、「仏教」と「社会福祉」の結合様式のとらえ方である。

ここで取り上げる諸説は主に以下の研究者によるものである。まず、仏教学的アプローチから中村元氏、道端良秀氏、水谷幸正氏、社会学的アプローチから孝橋正一氏、上田千秋氏、中垣昌美氏である。また、服部正穂氏は「仏教社会福祉学（論）」の原理に関する研究の諸説を考察分類し、むすびとして次のように述べる。

仏教福祉に関する以上の諸説は大別して、仏教即社会福祉Ⅱ仏教社会福祉、仏教＋社会科学Ⅱ仏教社会福祉と
いう二類型に分けることができよう。第一の類型はさらに二つに分けることができる。一つは仏教思想信仰——
その中核は慈悲——を基調として展開する社会的実践が仏教社会福祉の実現に連なるといふもので、これは中村
道端両氏にみられる見解である。もう一つは社会科学を基調とするものではなく、仏教（学）を基調として確立
し、実践的に展開される、その意味で仏教即福祉と考えられるものである。これは水谷氏の見解にみられるもの
である。ここでは同じ社会福祉であっても、社会科学的社会福祉ではなく、それとは別な社会福祉としての仏教
社会福祉が示唆されている。

また第二の類型にも二つのタイプがみられる。一つは社会科学による社会福祉では充分ではないので、それよ
り充実したものにするために仏教を導入するというものである。これは森永、守屋両氏にみられる見解である。
もう一つは社会福祉は社会科学で充分であるが、あえて仏教を入れるとすれば、それは実践者の主体性の確立に
有意義だからである。これは孝橋氏の見解である。（「仏教社会福祉に関して」『東海仏教』三十、一九八五年、六〇）
六一頁

なお、今回は森永、守屋両氏の説に関する考察は見送った。今後考察しなければならないと考える。

(一) 仏教学的アプローチ

(二) 中村元氏の説

われわれ人間の現実生存について考察するに、人間の行為は、質量的物質的なものにはたつきかけることよって成立する。物質的側面から乖離した精神現象なるものはありえない。したがって慈悲行或は利他行なるものは、自己の身体を勞して他人の物質的諸条件の改良に努力するということのうちに、まず具現される。この点から見ると、物質的諸条件の改良のつとめをはなれて仏教なるものはありえない。(「慈悲の精神」田宮仁・長谷川匡俊・宮城洋一郎編『仏教と福祉』北辰堂、一九九四年、九頁、初出は「慈悲」平楽寺書店、一九五六年)

さてこのような理論的要請は、おのずから組織的な社会事業となつて展開せねばならぬ。社会奉仕の事業なるものは、インド、シナ、日本を通じて、仏教或は仏教的な思想の行われていた時代には盛んに行われていたものである。(中村、前掲論文、一一頁)

(二) 道端良秀氏の説

仏教の社会福祉事業は、仏教のあるところそこに仏教社会福祉事業がある、といつてよいもので、仏教と社会福祉事業は一つであるといつてよい。仏教は言うまでもなく、人間救済の宗教である。いろいろの系統があり、いろいろの宗派に分類されているとはいつても、いずれも人間を幸福にし、社会を安寧ならしめようとするのが仏教である。(『中国仏教と社会福祉事業』法蔵館、一九六六年、二二一―二四頁)

社会事業ということが、古来歴史の上では常に救貧と救病と、災害に対する応急的処置とがあげられ、橋を作り道を直す土木工事などが、強く印象づけられているが、単にこのようなことだけが社会事業ではない。社会の秩序を正

し、人々に幸福をもたらすためには、まずそこに住む人人の姿勢を正さなければならぬ。政治にしろ、経済にしろ、または法律にしても、それは人間によつて左右されるものである。人間がいかにあるべきか、これが根本問題である。この根本問題の解決に努力するのが、仏教なのである。

この意味において仏教のあるところ、広義における社会福祉事業あり、といわねばならぬ。しかも仏教は慈悲の宗教であり、大乘菩薩行なのであることを思えば、仏教の社会教化から、自分の肉身をも与えて、飢餓人を救おうとする、仏教徒の捨身の行までことごとく社会福祉の事業でないものはない、といつてよい。(道端、前掲書、一四一―一五頁)

(三) 水谷幸正氏の説

社会福祉とは、決して救済や慈善のみを指すのではなく、社会理想の実現をめざすものであるから、宗教はその中にもつ宗教理念にもとづいて、理想社会や理想人格の実現を通じて、必然的に社会福祉をめざすことになるであろう。もちろん、そこには社会状態や政治経済という外的条件によつて左右されるメカニカルな複雑な問題を内包しているから、それらについての実際の技術的改革についてもおろそかにすることはできない。その解決方法を研究対象とすることも社会福祉学の重要な一面であるが、それだけに終わってしまうならば社会科学としての社会福祉にとどまるのであつて、血の通つた生きた社会福祉にはならない。社会福祉の背後に宗教理念が支えられていなければならないし、また宗教は、社会福祉という面においてこそ、今後の社会における担当役割がもつとも有効に發揮されるであろう。(「浄土教と社会福祉」田宮仁・長谷川匡俊・宮城洋一郎編「仏教と福祉」北辰堂、一九九四年、九五頁、初出は「浄土宗学研究」第一号、一九六七年)

仏教社会福祉とは、たんに仏教と社会福祉との結合をはかるだけのものではなく、社会福祉のあり方が仏教的理念

にもとづいて明らかにされたところに打ちたてられるものである。したがって、それは仏教社会福祉学あるいは仏教福祉論という名のもとに学問的に組織化され理論的に体系化されるべきものである。(水谷、前掲論文、一〇〇頁)

わたくしの意図する仏教福祉学は、社会科学の二科として成立するというような仏教福祉論ではなく、仏教ブローパーからの必然的な展開としての社会福祉を説明しようとするものである。仏教が人間社会へ展開するには社会福祉という形でなければならない。それ以外の展開のしかたは考えられない、という考え方である。つまり仏教理念が人間に受けとめられ実現されたものをすべて社会福祉という、立場である。さきに述べたように、ここでいう仏教福祉とは仏教と社会福祉とのたんなる結合をはかるだけのものではない。それをかの六合釈というならば、「仏教と福祉」というような相違がいままでの仏教学や社会福祉学の立場であり、「仏教の福祉」「福祉の仏教」という依主釈が社会科学としての仏教社会福祉学という立場であり、「仏教即福祉」という持業釈がわたくしのめざす仏教福祉論なのである。(水谷、前掲論文、一〇四―一〇五頁)

(二) 社会福祉学の立場と禅の関わり方

まずはじめに、社会福祉とは何かと言うところから出発しなければならない。このことの理解なくしては論点を見失ってしまうことになりかねない。孝橋正一氏は社会福祉(孝橋氏は社会福祉という用語は使用せずに社会事業というが、同義語であると規定している)を次のように述べる。

資本主義制度の構造的必然の所産である社会的問題にむけられた合目的・補充的な公・私の社会的方策施設の総称であって、その本質の現象的表現は、労働者Ⅱ国民大衆における社会的必要の欠乏(社会的障害)状態に対応する精神的・物質的な救済、保護及び福祉の増進を、一定の社会的手段を通じて、組織的に行うところに存す

る(『全訂版 社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房、一九六二年、二四―二五頁)

この説明は現代の社会福祉についての得たものである。また、孝橋氏はいう。

仏教社会事業の理論と実践が、主として大乘經典のえがきだしている慈悲と菩薩行を、仏教的愛とそれに基づく愛他的行為として、「歴史と社会」の規定をおりこむことを忘れ・見のがして、そのまま近代・現代社会の中に頭腦的操作で持ち込むという冒険をおかしながら、それが致命的な誤謬であることに気づかなかつたり、さらにはなほだしい場合には、慈悲と菩薩行をもって、社会改造の原理と政策基準にすえるという、宗教を形而上的基礎に持つ社会改造論さえ、観念的に成立させる精神主義的偏向をもたらすことも、けつしてめづらしいことではないからである。（『社会科学と現代仏教』創元社、一九六八年、二七二頁）

仏教と社会科学が機能する領域や内容の区別をはつきりさせることが必要であり、仏教の思惟や論理をそのままストレートに社会現象の解釈や社会問題の解決方法に流用・適用してはならないことに注意を払う必要がある（『仏教と社会事業の結合様式』『仏教福祉』第四号、一九七七年、一〇頁）

つまり、中村・道端両氏に見られるような現代の資本主義社会とは異なる時代・社会における仏教社会事業・仏教的慈善事業を現代の社会福祉に生かそうとすることは基本的に間違っている。ただし、社会福祉の歴史学の中であれば、それは意義深いものであろう。また、水谷氏の説に見られるような、「宗教理念にもとづいて、理想社会や理想人格の実現」を想定することも批判されている。

仏教が福祉（広義な意味で）であることは認めうるが、狭義な意味での福祉、つまり社会福祉が仏教であるとは認め難い。安易に「仏教」と「社会福祉」を結び付けようとするのではなく、その相違点を明らかにすることの中からその関係を見つめていかなければならないであろう。

仏教が社会福祉に提言するときは、社会科学的方法でなければならず、また、今の資本主義社会において活動や提言がなされるべきであらう。上田千秋氏は次のように述べる。

そこで慈悲の理想に基づいて利他行に努めたこれまでの仏教者、仏教信者をすべて社会事業家とみなす考え方が生まれるようになる。

一般的な例では、阿育王（B.C.二七三―二三三頃）や慧遠（三三四―四一六）や聖徳太子（五七四―六二二）等がパイオニア的社会事業家であると紹介され、道昭（六二九―七〇〇）、行基（六八八―七四九）、空也（九〇三―九七二）、重源（一一二二―一二〇六）、叡尊（一二〇一―一二九〇）、忍性（一二二七―一三〇三）、一遍（一二三九―一二八九）等を、代表的な僧侶の社会事業家とみなす説明が、今なお跡を断たない。しかもこの種の説明が仏教学者にとどまらず、社会科学の認識に乏しい社会福祉の研究者の間にも折節見かけるが、「仏教福祉」を意識して語る場合には、歴史の上での仏教的慈善を、無条件的に美談として賛美するのではなく、慈善・慈悲が対象者の人格や対象者を取り巻く社会制度については殆ど無関心のままに、従って貧困を広く社会問題として把握することなく行われたことから、今日の社会福祉とは本質的に異なっていることぐらいの認識を持って語るべきであろう。（「社会福祉学の成立を求めて——社会福祉（学）の視点から仏教福祉を考える——」田宮仁・長谷川匡俊・宮城洋一郎編『仏教と福祉』北辰堂、一九九四年、一一七―一二八頁、初出は『同朋学園仏教文化研究所紀要』一三、一九九一年）

禅は封建時代においては、為政者側についていたきらいもあるがゆえか、これまで禅者の慈善事業については触れられることが少なかったように思う。中国唐代の悲田院の建設は則天武后によってなされたものであり、その慈善事業も経済的なサポートがなければ出来なかったのではないかと考えられる。事業が行われた背景を知ることなくしては、現代の、これからの社会福祉に貢献出来るような提言にはなりえないであろう。

禅の公案、祖師たちの言行の記録などにおいてもその背景への考察なくしては、正しく見て分析することは出来ないはずである。なにせ釈迦の教えは対機説法、隨機説法と言われ、その言行は応病与薬である。機や病を知らずに説法や薬の意味、効用を知ることが出来ないであろう。例えるなら、百丈懷海禅師の「一日不作一日不食」の言葉も、

背景・状況を汲み取らずに「働かざるもの食うべからず」と解釈してしまうのである。

中垣昌美氏は中村元氏、道端良秀氏、水谷幸正氏の諸説を取り上げたのちに、次のように述べる。

これらの諸研究に共通している論点は、仏教福祉（論）である限りにおいて、仏教理論からの必然的展開であるべきであるということに集約される。この場合に了解される「福祉」の概念は、基本的には超歴史的・超社会的に規定される最広義の福祉概念としてとらえられている。それは実態概念ではなく、むしろ仏教理念ないし理想を志向する目的概念である。もう一つの共通な論点は、対象認識が人類とか人間という超歴史的・超社会的概念に抽象化され、歴史的・社会的現実態の上に生存する具体的且つ客観的な労働者大衆としての人間とか、社会の仕組みや制度の構造的欠陥から必然的に生ずる社会障害の担い手としての人間を規定していない。したがって、人類の繁栄、安寧、幸福、調和、秩序維持、人間の完成、社会理想の実現といった諸概念が福祉概念と同記号で結ばれるのである。その結果、仏教社会事業論は結局仏教福祉論にとどまり、仏教社会福祉論と一線を画することとなる。（『仏教社会福祉論考』法蔵館、一九九八年、二二頁）

今の社会において、仏教学の一部である仏教福祉論が現実的に有益なものとなりうるであろうか。おそらく理想論として存在し続けるであろう。しかし、それはそれで存在価値はあると考えられるし、仏教が宗教として、絶対性を保持するためには無難なのかもしれない。しかし、中垣氏はここで、狭義の社会福祉学を基盤とする仏教社会福祉論を求めているようである。

孝橋氏は結合様式を次のように述べる。

それではいったい、すぐれた愛他的行為や救済活動の人間的实践としての慈悲と菩薩行は、近代・現代的な社会的存在としての社会事業といかにかかわりあうことができるのであるか。ここで注目しなければならない問題点は次のとおりである。

(1) 仏教社会事業への仏教原理(精神)の導入は、社会事業における主体的契機としてであること。それは客観的条件としての社会事業を規定すべきではないこと、いいかえると、仏教原理を歴史的・社会的存在としての社会事業を規定する上位概念として、社会的諸問題の解決の体系上に位置づけられないことである。

(2) 関連的に仏教のもつ形式・方法や儀式・行事をそのまま社会事業のなかへ持ち込むのではなく、仏教の持つ意味・精神と方法をくみとり、それを現代社会的に生かすべきこと。それは主体的契機にとって、生の矛盾の行為的統一(空の洞察・体認)としてすぐれて実践的であり、仏教的に特徴的である。

したがって、両者の関係づけ、つまり結合・統一様式は、そのもつとも望ましい姿においては社会事業の主体的契機がすぐれて仏教的であればあるほど、客観的条件としての社会事業の活動と展開が、仏教に関してはまったく沈黙したまま「仏教的カラー」は、本来的に透明・無色でなければならなかった。社会科学の理論と法則が指示する合理的指針に基づいて、その路線のうえで論理的・意欲的にすべりつづけるという状況となるであろう。もちろんそのさい、社会科学の理論と法則そのものが、社会的存在とその運動法則をありのままに正しく認識把握されたものであるという前提にたっているが、社会科学の理論と法則をそのようなものとして認識把握するためにも、社会科学者の姿勢と態度の主体的契機を規定するものとして、仏教は自覚的・効果的なものをよびますことに役立つにちがいない。(『社会科学と現代仏教』創元社、一九六八年、二七一―二七二頁)

現実的に社会福祉に仏教を生かそうとすれば、この孝橋氏の結合様式が妥当性が高い。信教の自由により宗教は容易に公の場所には踏み込めないのである。しかれば、いかにして宗教である仏教が公の福祉に入り込めるか。孝橋氏の言うように「仏教的カラー」を表に出さないことである。このようなことを言えば、仏教の側から、仏教が骨抜きになってしまうのではないかと批判が出るかもしれない。しかし、ここにおいては仏教の数ある宗派の中でも、比較的宗教色の薄い禅は可能性があるのであるのではないか。

上田氏はこれからの仏教のあり方について次のように述べる。

私は、これからのアジアにおける福祉社会の発展には、仏教の現代化が大きな鍵になると考えている。仏教の示す普遍的眞実が新しい時代にふさわしい形で説かれ、市民に共感を与え、より高い自己実現の指針となり、人生に意味と目的を与えることが望まれる。仏教福祉の研究の方向は、過去の救済事象に焦点を合わせるよりも、現実を見つめて、仏教の眞理がどのような形をとれば、社会福祉の具体的な活動の中に生かせるかについて問い続けることにあるのではなからうか。「地球とそこに住む一切の生きとしいけるもの」への「限りない友愛」を説いた『メッタスタ』等初期仏教經典の、より現代的な理解が切に求められる。(上田、前掲論文、一三三頁)

ここにおいても仏教を現代社会的に生かすことが述べられる。難解な禪の言葉をどのような方法で伝えれば、市民に理解が得られるのであろうか。禪学の研究全体の発展が望まれる。

中垣氏は孝橋氏の結合様式を紹介した後、次に次のように述べる。

この孝橋正一説は歴史性と社会性をふまえた本質論であり、基本的に正しいと考えてよいが仏教社会事業研究の理論枠組みとしては現実性と具体性において今なお不十分である。(中垣、前掲書、二十八頁)

私はさきに、仏教社会福祉論は、仏教の福祉(仏教社会事業)を基本的モデルとし、歴史性を取り入れた社会科学のアプローチによる研究枠組みを設定することであると述べた。仏教(厳密には仏教者または教団)と何らかのかかわりを持つ社会福祉・社会事業の包括的概念として仏教社会福祉を据え、歴史的社会的現実態における仏教社会福祉の位置、形態、内容、運営、ヒト、モノ、カネ等について明らかにしていくことに、仏教社会福祉論の研究枠組みを設定することができる。このことは、また、仏教と社会福祉・社会事業の結合様式を明らかにしていくことでもある。(中垣、前掲書、一九頁)

今後は現実性と具体性の帯びたものとしての禪社会福祉論を構築しなければならないのである。仏教と社会福祉の

結合様式を形而上学的に考究するのではなくして、歴史的社会的現実態において考究しなければならない。

仏教あるいは禅は現実を直視することを説く。特に禅においては前世や来世よりも現世を重視し、生活そのものが禅であると言う。ここに禅の現代化の可能性があり、仏教社会福祉論の一分野としての禅社会福祉論の構築の糸口があるのではないか。

三、結

これまでに「禅と福祉」を扱った研究がある。

池田豊人氏は「禅と福祉」〔花園大学研究紀要〕一二号、一九八一年、五九―六〇頁〕の冒頭で次のように言う。

禅は宗教であり、福祉は思想であり社会公共的な目的概念である。また、社会福祉の学問は応用科学であり、禅は仏教であり宗教であつて、およそ次元を異にし文化的系譜とその基盤も相違している。

しかし、禅も福祉も広義には、現代社会の人間の上にかかる不安や苦しみの解決を目指すものであり、延いては人類の和平と福祉に寄与することを目的とするもので、明確な共通点を持っている。

そして、最も今日の課題である社会福祉において、禅とその思想、その生活、その行為、その作用が果すべき役割は非常に大きいと云わなければならない。

そもそも社会福祉の発生は、歴史的にその初期から、密接に宗教と関わっていたことは論を俟たない。否、実際のには社会福祉は宗教そのものの体質から発生し育成されたと云つても過言ではなからう。

勿論、その発達段階においては、人間科学の分野からの作用が大きく加わってくる。そして、現実の社会福祉の理論において実践において、科学的専門化・技術化が強調され、ともすれば、人間の福祉を忘れた歪みをさえ

感じられるのである。現在の社会福祉に現れている逆機能的結果に対して、禪の立場から一管見を試み、福祉の本質を追究しようとするのがこの小論の目的である。

ここにおいては、福祉と社会福祉の差異が明確に認識されていないようである。また、社会福祉と宗教の関わりを強調するのは社会福祉史の問題であり、現代にはそのままストレートには持ち込めないものである。ここでは社会福祉学からのアプローチが見られず、内容は「仏教即福祉」論であるといえよう。よって今後、現代的・歴史的・社会的に再考していかねばならない。

私も現代の社会福祉において、禪の役割は非常に大きいと感じる。しかし、池田氏の言うように禪と社会福祉とは基盤が違うのである。池田氏は「禪の立場から一管見を試み、福祉の本質を追究しようとするのがこの小論の目的である」と言うが、私は立場を異にしているは議論になり得ないので、禪が現代化して、つまり仏教学から飛び出て社会福祉学の中に入り込むことも必要ではないかと考えるのである。今後は、禪の一部（孝橋氏の言う「仏教的カラー」を抜いたもの）を社会科学である社会福祉の土壌に持ち込み、その上に禅社会福祉論の構築を試みたいと考える。と同時に、民間事業としての禅社会事業のモデル作りもされなければならない。

今回は具体的な現実性を帯びたものとしての「仏教（禪）」と「社会福祉」の結合様式は提出できなかつた。今後の課題としたい。